

英語圏におけるマルサス人口論の普及

永井義雄

本セッションには、二つの特徴がある。一つは、既刊4冊の成果を継ぐということである。すなわち、『マルサス勤労階級論の展開』（柳田、1998）、『マルサス派の経済学者たち』（中矢・柳田編、2000）『マルサス理論の歴史的形成』（永井・柳田・中沢編、2003）『マルサスと同時代人たち』（飯田・出雲・柳田編、2006）である。これらの文献からあきらかなように、さしあたり、われわれはマルサスの内的論理を、歴史的社会的にあぶりだそうとする。（この中心に柳田芳伸が存在する。）そうして、本セッションはこうした問題意識を継承しつつ、予定されている（仮題）『マルサス理論の国際波及』の序曲となるべきものと位置づけられる。第二に、この国際波及の総合的研究はわれわれのものをもって世界的にも嚆矢とするものであって、他にいまだ例をみないということである。

国際波及のうちでも、われわれはさしあたり、英語圏を対象とする。マルサス理論が波及するうえで、言語的にもっとも容易に波及したからである。英語圏における国際波及は、他言語への波及を追及するうえでまず、典型としても前例としても、とりかかるべき対象である。しかしわれわれは、この波及をひとまず19世紀に限定するし、マルサス理論といっても、このさい、われわれが取り組むのは『人口の原理』である。この書物自体が、時代とともに論点を増幅する歴史的文献ではあるが、それは別として、『経済学原理』とは異なる受け入れ方をされたことは、この書物のもつ多義的な目的と性格によるところが大きい。われわれの研究は、こうしたこの書物自体の変転する論理を、それが受け入れられた英語圏諸国における受け入れられ方とそのときの歴史状況とのフィードバックを通じて、解明し、浮き彫りにするところにある。ともあれ、本セッションは、英語圏のうちでもアングロアメリカを対象をしぼる。

だれしも知るように、マルサス人口理論は新マルサス主義として普及する。これはマルサス人口理論のもっとも現実的に有効な使われ方だからである。しかし、新マルサス主義は一様ではないし、それが担った歴史的役割も一様ではない。ときにそれは一種の左翼思想とみなされさえするが、改良思想とみなされることもあり、ときに反動思想とものしられる。ドイツにおいて顕著なように、賃金論とのかかわりにおいては、マルサス人口理論はいかようにも適用可能である。

ブリテンにおいては、故佐藤共子氏を継ぐ柳田が解明するように、ジョージ・ドライスデールは、改良主義的にマルサスを再生する。これは、オウエン式社会変革論に対する緩和剤であった。マルサス自身はオウエンに真正面から立ち向かうしオウエンもマルサスに直接的に対抗するが、ドライスデールにおいては、論理よりは実践が喫緊の課題であった。時代がわれわれに近くなるにつれ、論理よりは実践が重要になるのは、後進諸国においても同様であった。この後進性の段階的相違がかれらの実践と論理を規定する。山崎と柳沢はアメリカを対象とする。このとき、アメリカは後進諸国を代表する側面をもつと同時に、広大なヒンターランドを背景に成長する特異な途上国である。マルサスはこの国において、他の波及国と共通する体験をすると同時に独自の様相をしめすであろう。